

新会長あいさつ

会長就任にあたって



東京大学大学院 教授 工学系研究科
飯塚 悦功

このたび日本品質管理学会第33~34年度の会長に就任しました。会長職に染なるときはないとわかってはいますが、それにしても厳しいときに大役を仰せつかったものと身の引き締まる思いです。

ものづくり大国、品質立国といわれた日本は、成熟経済・社会における産業構造の変化に対応できていないという構造的ギャップをかかえ、いまもってこの構造的不整合は解消されておられません。品質に対する理解も熱意も落ち、企業での取り組みにおいては品質管理教育・訓練投資の減少、品質にかかわる常識の低下、品質意識・改善意識の低下が起きています。こうした中でJSQCには、Q-Japan再生のための的確な構想を提言し、広く訴える役割・責務があります。

Q-Japan再生のために3つの基本戦略が必要であると認識しています。その第一は、時代が求める「精神構造」の確立です。日本の品質管理の原点に返り「真理追求型ハングリー精神」を取り戻し、同時に経済・社会の成熟化に伴って必要となる「自律型精神構造」の醸成に努めることです。

第二は、「産業競争力」という視点で品質を考察することです。とくに製造業における高付加価値製品の提供、組み込みソフトウェア開発競争力向上、サービス生産性向上に焦点をあてた質向上・効率向上活動を推進することが必要です。

第三は、「社会技術」（社会が全体として保持していなければならない技術）のレベル向上です。この観点から医療安全・質保証、原子力安全、国民生活の安心確保への諸課題への取り組みが必要です。

これら基本戦略を受けて、品質および品質管理にかかわる学会として、JSQCは以下のような施策を

講じていきます。第一は、概念の発信、教育・訓練機会の提供です。品質にかかわる概念を整理し、21世紀に求められる品質概念、品質マネジメントの方法論の提案をしていきます。例えば、顧客価値、品質創造にかかわる概念の提示、JIS/TRとして発行された「持続可能な成長の指針」の概念と自己評価法の普及、ISO 9000の戦略的活用、CQO (Chief Quality Officer) の役割定義と育成キャリア・パスの考察などです。

第二は、計画研究、公募研究の充実です。品質・品質管理にかかわる思想・哲学・概念の確立に向けての取り組み、方法論の確立、適用指針の開発など多くの分野での学際的な実践研究が必要です。こうした機会を設け、重点分野に誘導・激励します。

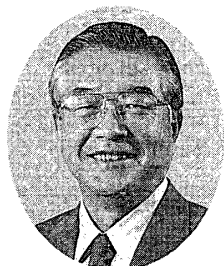
第三は、視野拡大の機会の増強です。シンポジウム、フォーラム、サロンなどの機会を数多く設けます。産学連携を促し、明確な目的を持った実践的研究を支援・誘導します。視野拡大のため国際的活動も活発に進め、ANQ (Asian Network for Quality) への積極的関与、ASQ (アメリカ)、EOQ (ヨーロッパ) との相互発表、相互啓発に力を注ぎます。「横断型基幹科学技術研究団体連合」にも積極的に参画し、とくに「SQCとシミュレーション」の融合では主体的役割を果たします。

第四は、会員・賛助会員サービスの一層の向上によるJSQCの基盤強化です。提供する情報コンテンツの充実と参加の場の提供が重要との認識に立ち、サービスの質的改善のために、有用な情報の通知、インタラクティブな関係の場を設定いたします。

私たちの学会が負う社会的責任を再認識し皆様とともに前進します。よろしくお願いいたします。

前会長あいさつ

会長退任にあたって



(株)デンソー 代表取締役会長
高橋 朗

皆様のご支援ご協力により第32年度日本品質管理学会会長の任を終えることができましたことを厚く御礼申し上げます。

会社の時間軸と学会運営の時間軸の違いから、未熟な私では1年間ではやり残すことばかりで、学会の皆様には申し訳なく思っております。そのような不首尾な結果になりましたが、重点的に考えてきたことを2つだけ申し上げたいと思います。

1つは、今の憂うべき世情に鑑みて経営者および企業人に強力なメッセージが出せないか、日本品質管理学会として何ができるかであります。そこで、CQO (Chief Quality Officer) という概念を打ち上げて、それを頂点とする価値観・職務要件・教育などの体系化ができないかに挑戦しました。

手始めに経営トップと品質保証部長へのアンケート調査を行いました。その結果は私が想像するよりもっと前向きでありました。CQOの職責を整理して学習カリキュラムを作成することに、多くの企業は高い関心を示しております。

これを進めるには、企業の目的は「顧客を創造する」ことであるという原点に立ち返ることではないかと思えます。これを品質の面から表現すれば、「質創造」ということになります。「質創造」という言葉は狩野紀昭先生も使っておられますが、この「質創造」には、従来からの顧客に迷惑をかけない品質保証と新しい顧客価値やブランドを創出していく顧客価値創造の両方を含んでおります。いずれもが絶えざる創造を要します。

各々の企業は、「質創造」ということを経営の中心に座らせ幅広い質の概念から何を選択してどのよう実践していくか、そして顧客との絆を強化して

いくかが最重要な課題となることを認識することになります。

私は現在、日本ものづくり・人づくり質革新機構で3年間の時限活動をしていますが、そこでも同じ目的で活動しており、当学会に相応しい課題については是非当学会で引き継いでいただきたいと思っております。

2つ目は、会員満足度向上に何か新しい工夫がないかであります。産業界の会員が90%を占める当学会ですから、企業会員に関心や問題意識を呼び起こすような情報発信をどうしたらできるかであります。

そのようなアイデアを生み出すには、企業のニーズと学の手法研究を上手にマッチングするためのマップを常時整理しておいて、問題意識を共有することができたらよいと考えていました。これを実現するには相当な労力が必要ですが、継続的な実践が望まれます。

その具体的な事例として「シミュレーションとSQC」の連携が横断型基幹科学技術研究団体連合の1つのプロジェクトとして取り上げられ、早速上記のマップづくりから進めていくことになっております。

以上、2つのことを申し上げましたが、飯塚悦功会長のもと日本品質管理学会が今後ともますます力を発揮されますことを心から祈念しております。

*